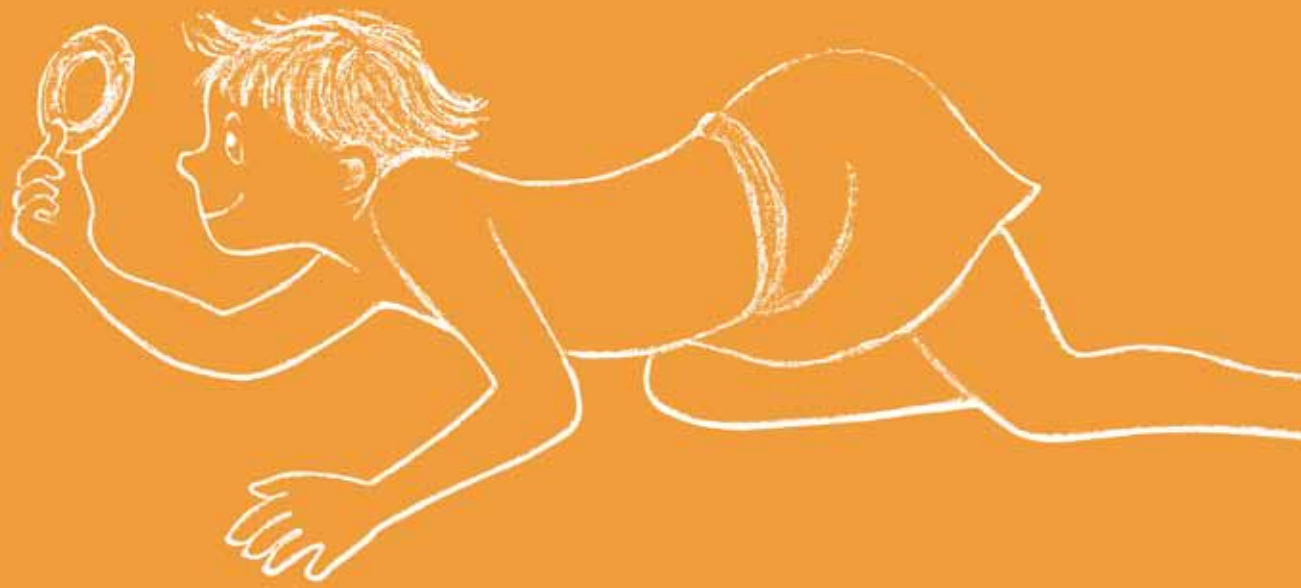
十三行博物館・こどもシリーズ1

過去に戻ろう

十三行人の生活

著者・管家琪
イラスト・邱千容
訳者・陳鋼



過去に戻ろう

十三行人の生活

十三行博物館・こどもシリーズ1
新北市立十三行博物館／発行

過去に戻ろう

十三行人の生活

著者・管家琪
イラスト・邱千容
訳者・陳鋼

館長のことば

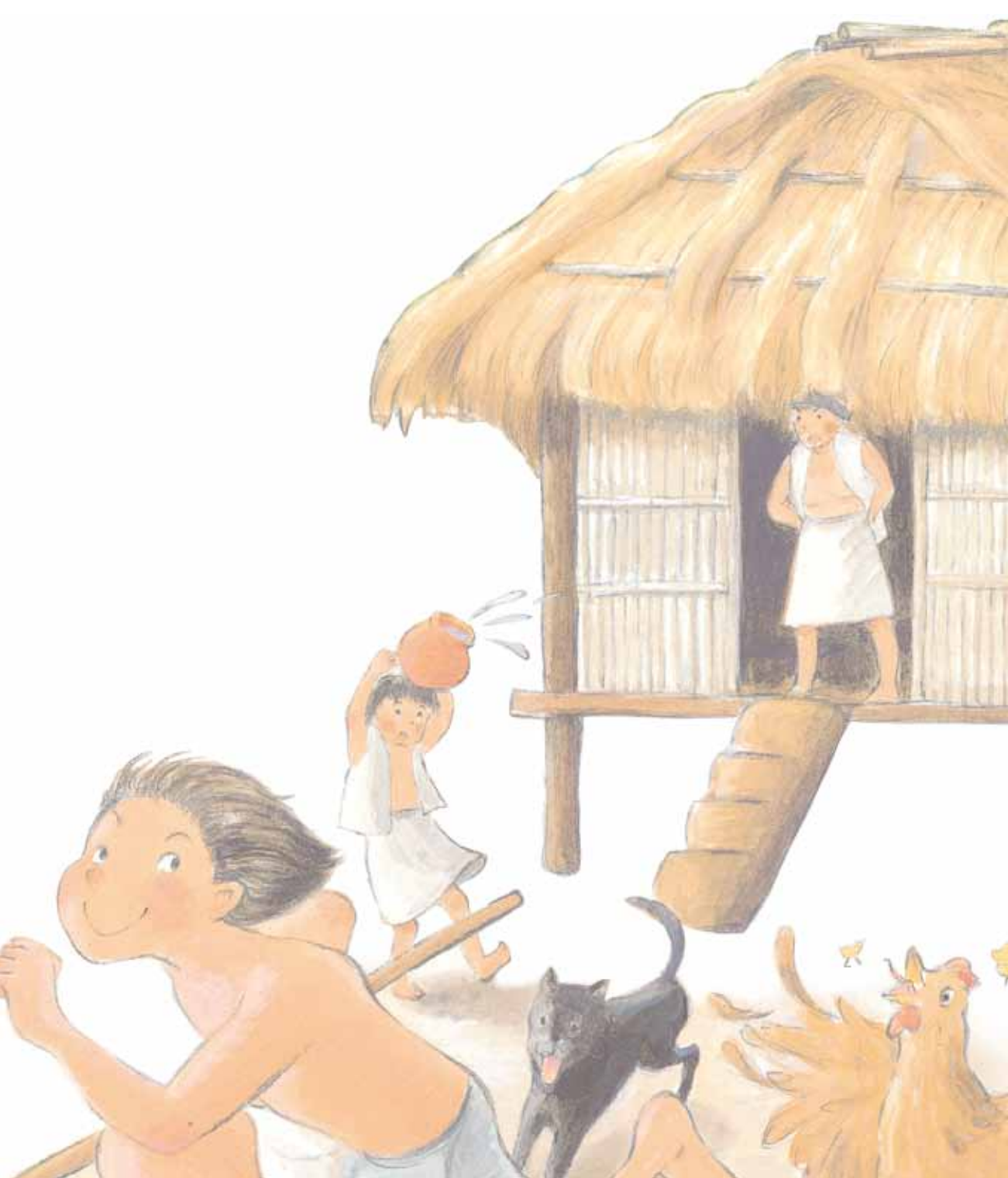
皆さん、知っていますか？十三行遺跡から出土された土器のかけら、青銅器や人面土器は、もともとは散らばったパズルみたいでしたよ。こうした遺物は静かに地中に眠り、発見されるのを待っていました。そして、考古学者はそれを発掘し、分類して、謎を解くように研究します。時の謎を解くことによって、十三行人の生活の全貌を、パズルを合わせるように復元してくれます。

むかしむかし、十三行博物館のあるところの近くに、十三行人が暮らしていました。彼らは川沿いで魚を捕ったり、土できれいな土器を作ったり、知恵を絞って鉄器を作り、台湾の鉄器時代の幕を開けました。十三行人は私たちと同じ月を

眺め、同じ淡水河のせせらぎを聞き、そして、同じ海風と湿気を感じていました。つまり、十三行人は私たちとは、まったくかけ離れている人々ではありません。

この物語の主人公の「イバイ」と「バディ」の足跡をたどり、歴史と時空の壁を越え、想像の翼をひろげて「昔」に戻りましょう。

十三行博物館館長　呉秀慈



過去に戻ろう
十三行人の生活

館長のことば　2
目次
むかしむかし　住民　7
やさしいイバイ　衣服　11
大切な日　食べ物　22
おかあさんの腕輪　居住　33
嵐が来る　交通　44
お手伝い　工芸　52
商船が来たあの日　貿易　65
ビーちゃんを偲ぶ　葬儀　74

むかしむかし

住民

ねえさん：今日はごっこ遊びしようか。
ドードーくん：ごっこ遊び？わーい！
何ごっこするの？
ウェイちゃん：私、お姫様になる！
ドードーくん：じゃあ僕、魔法使いになる。
ねえさん：はい。それでは、魔法使いさん、
タイムトンネルを通して私たちを過去に
戻らせてみてね。
ドードーくん：過去に戻るって、
何をする？
ねえさん：自分を十三行人だと思って…

さて、はじめよう。まずは「舞台」、すなわち十三行人が暮らしていた場所を紹介しよう。

学者の推測によると、今の十三行遺跡の環境は、十三行人が生きていた頃とほとんど変わっていない。気候にはたいした変化がなく、自然にもささいな変化しかない。例えば、この辺りにはもともと砂丘が多かったが、数十年前にほとんど消滅してしまった。

ねえさん：実は、この十三行の地には、三つの民族が暮らしたことがあるんだよ。

最も古い住人は、約2,000年前の新石器時代後期における圓山文化の人たち。だが、彼らが残した遺物は少ないため、駐在期間が短かったと思われている。

次に十三行の地に入ったのは、「十三行人」と呼ばれる人たち。彼

らは今から1,800年前の人で、ケタガラン族の先祖かもしれない。十三行人がこの地で暮らしていた期間は前後1,800年以上で、とても長かった。その時期の遺跡には、大量の遺構や遺物、そして墓地が残っている。

そして、三つ目の民族は、清朝時代にこの地に入った漢人の移民たち。彼らはもともと中国福建地区の人で、ここで約30世帯の小さな村を作り、農漁業で生計を立てていた。そして、1989年（民国79年）に八里汚水処理場の建設が始まった後、住人たちは次々とここを出て、八里のほかのところへ引っ越した。

やさしいイバイ

衣服

ドードーくん：じゃあ「十三行人ごっこ」しようか。十三行人ってどんなのか？

ウェイちゃん：私たちと同じに決まっている！きっと男の子も女の子もいた。

ドードーくん：あたりまえだろう！だから、十三行人の見た目について聞いたの。例えば、十三行人は服を着ていたんだろうか？

ねえさん：はい。樹皮、麻や鹿革などで服を作ったのよ。

ドードーくん：僕、樹皮を着るのはいやだ！
ウェイちゃん：私も！鹿革のほうがいいんだもん。
ねえさん：じゃあ、ここで一つの物語を聞こう。これは、一人のお父さんが、子供たちの服を作るために鹿革を探す物語なの…

父は息を忍ばせ、木の後ろに隠れて、二匹の鹿から目を離さなかった。

長女のイバイは大人しく
父のそばにしゃがんで、緊張していた。
もともと、父は愛娘をここに連れてきたくなかった。
彼はイバイに妻のそばで織物について学ばせたかった。イバイはまだ小さい子だが、早く織る技術を身につけたほうがよかろう。しかし、林に入ってしばらくしたら、イバイに後をつけられているのに気づいた。この時に彼女を家まで送るのは面倒で、しかたなく彼女をそばにいさせることにした。

彼女はわくわくしているのだろう、と父は思った。イバイは、父が今日鹿を狩りに行くのを知って、兄のバディよりもわくわくしていた。これは、新しい鹿革の服がもらえることを意味するとイバイは知っていた。

だが、今日の狩猟は順調ではなかった。父娘はおよそ半日をかかって、ようやくこの二匹の鹿を見つけただけだった。父は一安心した。もうすぐ寒い季節が来るので、バディにもイバイにも新しい鹿革の服をあげなければならなかった。古いのはもう着ることができないほどボロボロだった。

この二匹の鹿は、明らかに子連れの母鹿だった。運がいい、と父は思った。バディとイバイに新しい服をあげられるだけではなく、一家が新鮮な鹿肉をも食べられる。

父は軽く矢を弓につがえた。今朝、矢先を磨いたばかりなので、尖っている。父は母鹿を狙うべく集中していた。彼は、一撃

で母鹿を仕留められると確信した。

この時だった。

イバイは急に、ぎゅっと、父の服を引っ張った。

父はイバイをにらんだ。なんでこんな時に邪魔するんだ、と思った。

そして、父が振り返ると、母鹿が子鹿を連れて森に入ろうとしている。父はもう一度弓を構え、照準を定めた。

しかし、イバイはまた父の服を引っ張った。

「どういうつもりだ！」と、苛立つ気持ちを抑えきれない父は、イバイを地に押し倒した。

イバイは大声で泣き出した。そして、イバイの泣き声に驚かされ、母鹿と子鹿は何のためらいもなく逃げだした。

狙う余裕がないまま、父は急いで矢を放った。結局、あたらなかった。

その瞬間、母鹿と子鹿は森へ逃げ込んで、姿を消した。

「なんということだ！」父は我を忘れイバイに怒鳴った。「おまえのせいで鹿革も鹿肉もパーになった！」

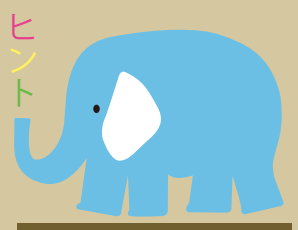
イバイはただ泣き続けている。

家に帰ると、イバイは母のそばまで走った。母は今、糸をこすっている。イバイはすぐ「手伝わせてほしい」という表情を見せた。

まだ怒っている父は暗い顔して、自分の鹿革の服を母に渡した。仕方なくこれを二着の小さい服にできるか、という意味をこめて。

父は再びイバイをにらんだ。なぜイバイが急に彼の邪魔をし、あの鹿の親子を逃したのがわからなかった。

しばらくすると、父はやっとわかる気がした。まさか、イバイは子鹿に母をなくす場面を見せたくなかったのか？と。これは、母と一緒に織物について学んでいるイバイを見て、思いついたのだ。



ヒント

今までの発掘では、いまだに十三行人の衣装に関する詳しい資料はない。だが、清代の文献で記された平埔族原住民の衣装の記述により、学者は十三行人の衣装について、信憑性のある推測を出せる。

獣の皮

麻

梶の木の樹皮

先史人類の糸のつむぎ方

●服の質料は革と麻を主とする。樹皮製の服もあったらしい。

●十三行遺跡から石で磨製された糸車がたくさん出土された。そして、麻の糸もわずかだが発見された。これは十三行人が織物の技術をもっていたと証明できる。彼らは紡錘、鉤のある木棒と麻の繊維で、糸を紡ぐことができた。

●考証により、台湾原住民の服は腰機（水平バックストラップ織機）で織られていた。水平バックストラップ織機とは、経糸が水平で排列し、バックストラップで腰につける織機を指す。このような

織機は主にアウストロネシア語族が分布する地域に普遍的に見られる。（アウストロネシア語族とは、南太平洋とインド洋の間で、アウストロネシア諸語を使う人たちを指す。台湾の原住民はすべてアウストロネシア語族に属する。）

●十三行人は狩猟する民族なので（大量のイノシシ、鹿と鳥の骨が発見された）、冬には鹿革の服を着ると推測される。当時の台湾には野生の鹿が多数いて、原住民にとって重要な資源になっていた。

革の上の脂を取り除く

革を晒す

大切な日

食べ物

ドードーくん：十三行人は何を食べていたの？
ねえさん：私たちとあまり変わっていないのよ。お魚、お肉、お米…そうだ、彼らは貝が大好きだった。特にハマグリが大好き。
ウェイちゃん：じゃあ私と同じじゃん。私もハマグリが大好き！

今日はイバイの「大切な日」。

今日、イバイは自分専用の木棒を手に入れた。それは母が彼女のために用意し、砂浜でハマグリを採らせるもの。

これは、イバイが大きくなって、正式に家を手伝うようになった象徴でもある。

イバイの友達のビーちゃんも、今日から家のためハマグリを採ることになった。

彼女たちは待ち合わせして、手をつないで砂浜まで歩いた。二人は互いに自分の木棒を見せながら、「今日はハマグリた〜くさん採ろう」と約束した後、砂浜でしゃがみ、地面を掘り始めた。

彼女たちにとって、この仕事は初めてではなかったが、この前に母と一緒に来た時は助手だった。

そして、今日の場合は、すべて彼女たちに任せられた。二人はこのような自分に誇りを持っている。

イバイとビーちゃんは普段、会ったらおしゃべりになるが、今日の二人は自分の初仕事にいい成果が出るよう、黙ってハマグリを採ることに集中している。

一部の貝は目でよく見ると見つけられるが、一部は砂浜の下に潜り、手でやさしく触って、貝の居所を確かめなければならなかった。時に彼女たちは浅瀬を軽く踏んで、手でハマグリを採った。

貝掘りに半日もかかったが、二人共大漁で家に帰った。

母はすでに三個の石で、水に満ちた一つの陶器の瓶をささえ、その下で火を起こし

ている。火がついたら、イバイは採ったハマグリを全部、瓶の中に入れた。

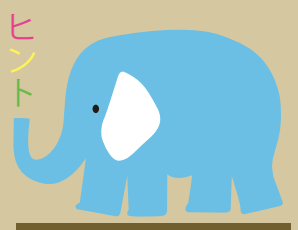
時はだんだん夕暮れに近づいていった。イバイはハマグリスープの香りをかいで、急にお腹がすいた気がした。

その頃、父はバディと共に帰ってきた。バディは一尾の魚を手にしていて、イバイに見せびらかした。これは明らかに、今日の「戦利品」だった。

今日はバディにとっても「大切な日」だった。父は初めてバディを連れて魚を捕りに行ったから。

その夜、一家は豊かな晩ごはんを食べて、すごく幸せな気分になっている。この山と海に囲まれ、食べ物の心配が要らないところに住んでよかったな、と思った。

この晩ごはんの中でも、バディは、自分が捕った魚が一番おいしいと思い、イバイはハマグリのほうがおいしいと思った。これらのものは、この兄妹が全力をこめて取った初めての獲物だったから。



ヒント

十三行遺跡での発見によって、十三行人の食べ物は、概ね四種類だったことがわかっている。

貝

十三行遺跡は海から200メートルくらいなので、海まで歩いても数分もかからない。今でも、地元の人は時々砂浜で貝掘りをしている。貝は手に入れやすく、調理しやすい食物でもある。十三行人は食べた貝殻を一箇所に集中する慣習があった。貝殻以外にも鉄くず、獣の骨、陶器のかけらなどもあり、これが考古学者が呼ぶ「貝塚」になった。

鑑定によると、十三行遺跡で発見された貝は少なくとも六十種類あった。中でもハマグリが最も多く、次いで多いのはシジミ。ともに同じ二枚貝であるが、ハマグリは主に川と海との境目に生息し、シジミは河口部における塩分の低いところに分布する。

魚

十三行遺跡から出土した魚の骨は種類が多く、遠海魚のものも少なくない。魚種はいまだに鑑定待ちで

ある。

漁網用の錘が出土されたため、十三行人が魚を捕ることが証明できよう。漁網を使う以外、モリで魚を捕っていた可能性もある。

動物

十三行遺跡で発見された遺物には動物の骨も多い。猫科動物、鹿科動物とイノシシ、キョン、犬、ニワトリ、鳥などの小型哺乳類のがある。

実は、十三行人はすでに錬鉄の技術を持ち、鉄器時代の人間であった。彼らは鉄器の製造方法がわかっていて、鉄の槍、矢じりや狩猟刀なども作った。鉄製のツールがあったことで、多くの野生動物も十三行人の重要な食物の源の一つになった。

植物

十三行遺跡からは炭化した稲穀も発見された。これにより、十三行の原住民はもう農耕時代に入っていたことが証明できる。だが、学者は十三行人がいまだに初歩的な粗耕法にとどまり、精耕栽培の域に達していなかったと推断した。そして、山と海に囲まれた十三行遺跡の地理位置は、漁猟にも採集にも便利だったので、十三行人の主食は稲ではなかったと考えられている。

おかあさんの腕輪

居住

ドードーくん：十三行人のお家はどんなものなの？

ウェイちゃん：そう！私も！十三行人のお家って、どんなものでできたの？

ねえさん：十三行人のお家は木材に、竹や茅でできたらしい。

ドードーくん：なんでわかるの？

ねえさん：十三行遺跡では石造建物の跡が発見されなかったので、石が家などを建てるのに使われなかったとわかる。

ドードーくん：でも、木材、竹、茅は腐りやすいじゃない。十三行遺跡ではそんなものは見つけられないはず。

ねえさん：その通り。見つけられないが、「柱穴」の跡で十三行人が使った材料を判断できるよ。

ウェイちゃん：柱穴って何？

ねえさん：想像してみて。竹で小屋を建てるには、柱となるものも要るだろう？柱となる竹は地中に深く挿される。年月が流れるにつれ、竹は腐っていくが、地面の穴は

まだそこにある。これは科学的な分析によって認識できる。柱穴の中の土は、周りの土とは成分が違うから。

イバイが目覚めると、両親も兄のバディもいないことに気づいた。もう午後なので、みんながきっと外で仕事をしているだろう。もともと、イバイも行くつもりだったが、今朝になぜか具合が悪く、嘔吐した。そこで、母は彼女に家で休ませた。

今、イバイは少しよくなった気がしたので起き上がった。だが、まだ仕事したくないため、少しサボろうと、家で遊ぶことにした。

何をして遊ぼうか？と、周りを見たら、母の巾着がイバイの視界に入った。

夕べ、母がその巾着を開け、父がくれたガラスの腕輪を取り出して玩んだ。イバイは触ってみたいな、と思ったが、母はそれを許さなかった。イバイはとても納得できなかった。まったく！ちょっと触っても大丈夫だろう。母が許さなければ許さないほど、イバイは余計に腕輪を触りたくなった。みんなのいないのは、まさに好機ではないか。

イバイは巾着まで走り、わくわくしながらそれを開け、ガラスの腕輪を取り出した。本当にきれいな腕輪だな！

イバイは母を真似し、腕輪を左腕にはめてみたが、サイズが大きすぎるため、腕を曲がって腕輪が抜け落ちることを防がなければならなかった。

だが、遊ぶのに夢中になりすぎた結果、イバイは

つい左腕を曲げたのを忘れ、腕輪がすぐ彼女の腕から抜け落ちた。

さらに大変なのは、腕輪は床の隙間を抜け、家の底に落ちてしまったことだ。

イバイの家は掘立柱建物で、多雨多湿な気候に適応でき、野獣の侵入をも防げる。腕輪が床の下の空間まで転げ落ちたのを見て、イバイは呆れた。

気が付いたら、大変！早く腕輪を取り戻さなくちゃ！と、イバイは思

った。

この時、イバイは外から音がするのを聞いた。誰かが家に登ってきたようだ。彼女は慌て始めた。しまった！こんな時に母が看病しに帰るのか、と。

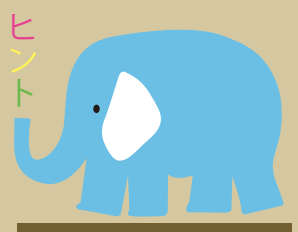
幸い、帰ってきたのは母ではなく、兄のバディだった。

兄を見るとたん、イバイはすぐ兄に助けを求めた。イバイは臆病で、下のほうに潜りこんだことはほとんどなかった。

バディは妹のピンチを知り、腕輪を探すべく、ためらわずに床の下に潜りこんだ。

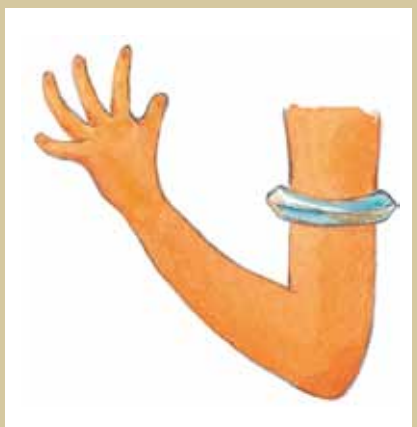
その後、腕輪は取り戻されたが、傷ついてしまっていた。おそらく、室外まで転げていった途中で地面で擦られたためだろう。

結局、イバイは母の詰問から逃げられなかった。

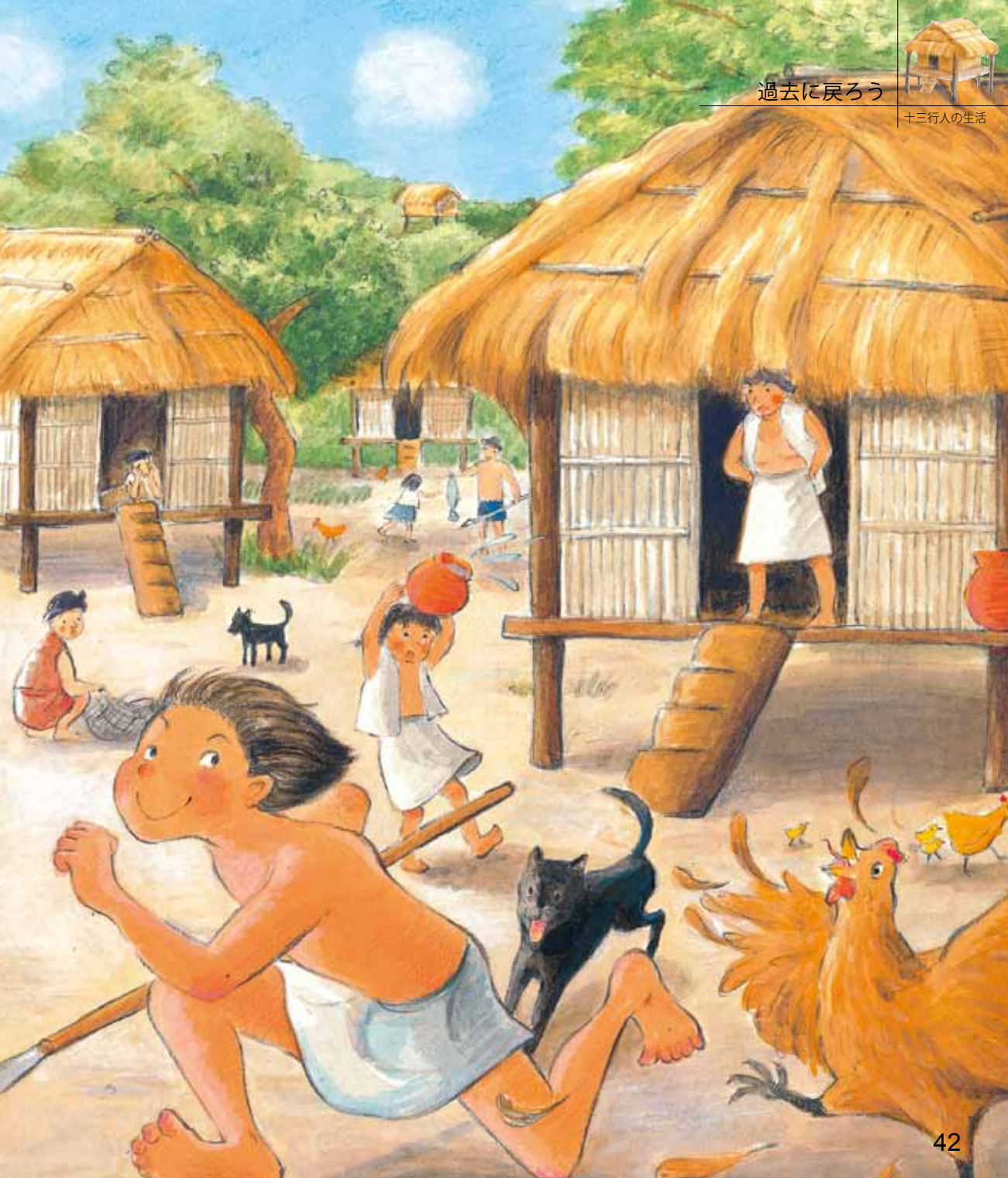


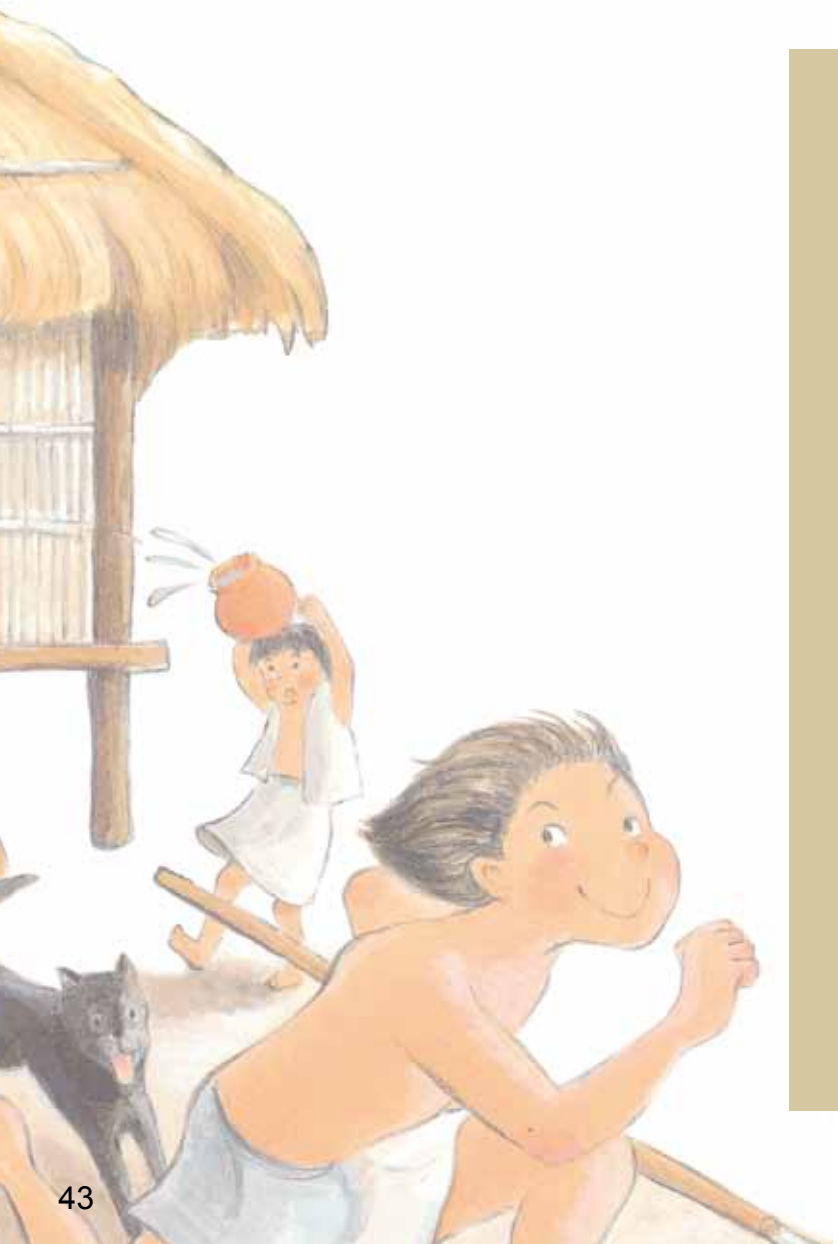
ヒント

● 十三行遺跡からはガラス製の腕輪とイヤリングが出土した。そして、色々な瑠璃と瑪瑙のビーズも何万個も見つかっている。それ以外に、金の破片も発見された。学者の推断によると、これらはすべて、十三行人が身につけたアクセサリーらしい。



● ガラスの腕輪の口径から見れば、腕ではなく上腕のほうにはめるらしい。これは、原住民がイノシシの牙の腕輪をつける仕方に近い





淡水エリアの多湿な気候のため、地元の住人は家を地面から持ち上げ、入るには階段を上らなければならなかった。十三行遺跡で発見された柱穴によって、十三行人の家は掘立柱建物だと推測される。掘立柱建物とは、木や竹の柱を立て地面から上に床を作る建物で、アウストロネシア語族に採用された住居形式でもある。

嵐が来る

交通

ウェイちゃん：十三行人って交通手段を持っていたの。

ドードーくん：あるに決まってるだろ。少なくともてくてくで。

ウェイちゃん：てくてく？

ドードーくん：自分の両足のことだ！

ウェイちゃん：もう！足じゃなく本物のことだよ！

ねえさん：今までの証拠から判断すれば、十三行人は船を主な交通手段としていたらしい。遠海魚の骨がたくさん出土したので、船がなければ、それを手に入れられるはずがなかっただろうね……

風がだんだん強くなっていて、周りも暗くなってきた。父が帰る時間になっているのに、父はまだ顔を見せていなかった。バディとイバイはす

ごく焦っていた。

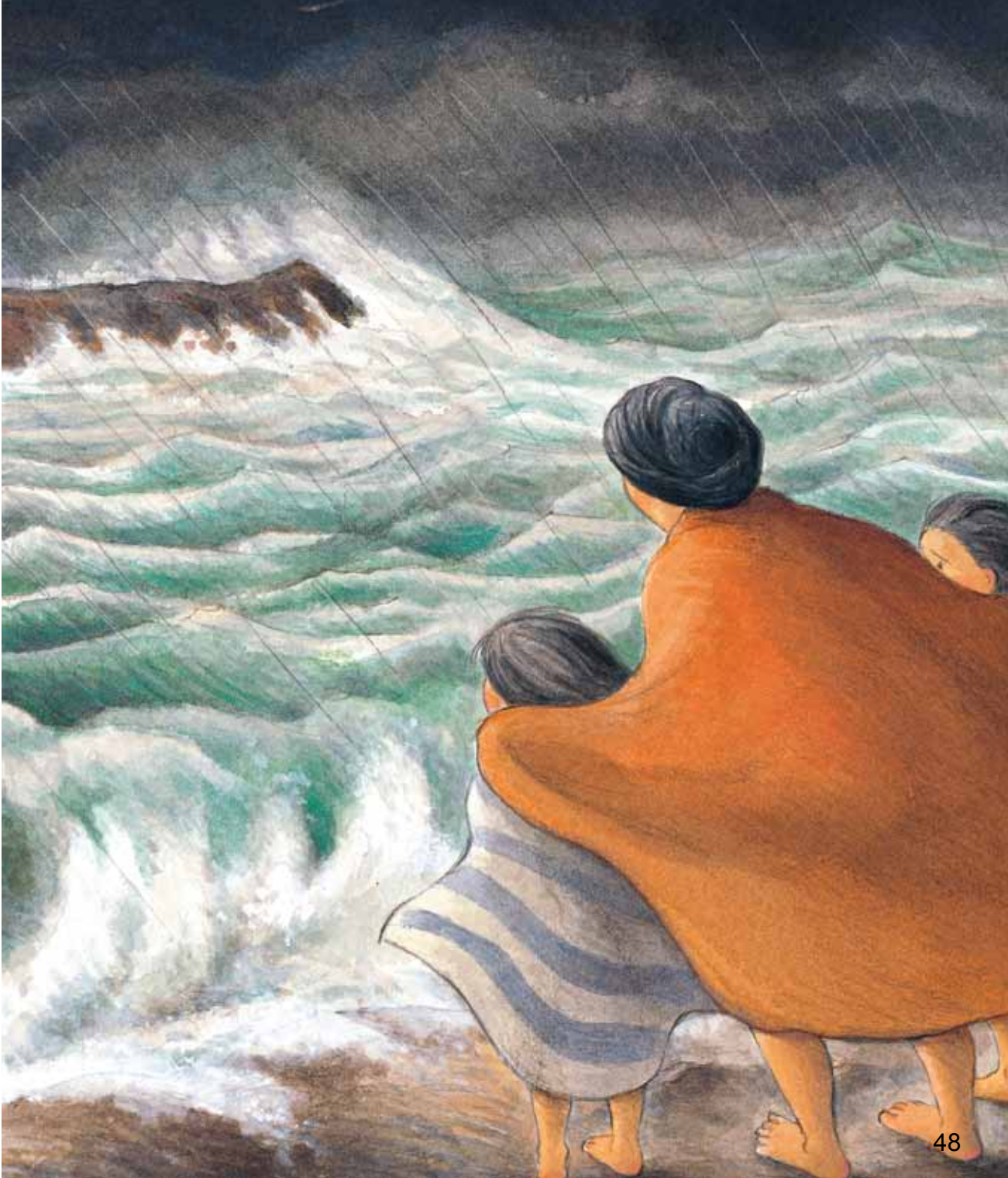
父は、ビーちゃんの父と共に、魚を捕りに行った。

きっと突如の嵐が邪魔しているだけ、と母が兄妹に説明し、慰めてみたが、母の憂いを帯びた顔は、逆に兄妹に確信のなさを伝えた。

またしばらく待っていたが、やはり父の姿は見えなかった。兄弟を慰めようとした母も、もう何も言えなくなった。母自身も焦っていた。

バディは焦ることより、深い恐怖を感じていた。昨日の朝、父は船の漕ぎ方を教える時、バディがだらしなかったため、彼に大声で怒鳴った。その時、バディは父を怨んだ。他の子の父はそんなに怒りっぽくないのに、何で父だけが……

バディは急に怖くなった。これは罰が当たったのかな。神様が、父を怨んだ罰として、父を連れて行ったかな。僕は永遠に父に会えなくなるかな。



恐怖を抑えきれなくなったバディは泣き出した。

バディは神様に伝えたかった。僕は本当に父を怨んだわけではないことを、そして、父が無事に帰ったら、これからは父のことを怨まないと誓う、と……

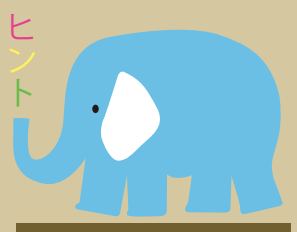
無事で帰ってきて、お願い、と、バディは心の中で叫んだ。まだ色々なことを教えてほしい。船の漕ぎ以外にも、イカダの作り方、モリの磨き方、稲の種まきなど、父に習うべきことは、まだたくさんあるのに…。

嵐はだんだん過ぎ去っていった。耐え切れない母は、海辺で待つことにした。バディとイバイもついていた。親子三人が待っている間に、ビー

ちゃんと彼女の母も来た。

また長い時間が経った。ようやく、海面に見慣れた小船が現れた。最も早くそれを見たのはバディだった。バディは叫びながら前へ走ろうとしたが、母に引きずり戻された。

バディはきれいな月を見て、急に脱力して、砂浜でしゃがみこんだ。この時のバディは、言い切れない感謝の気持ちで心がいっぱいになった。父は無事に帰ってきた。彼は、神様が自分の願いを聞き入れたと思った。



ヒント

● 十三行遺跡では未だに船が存在した形跡が発見されていないが、間接的な証拠がある。例えば遠海魚の骨が発見され、そして、磨耗した人の鎖骨により、十三行人はときどき船を漕いでいたことが推測できる。さらに、十三行人は頻繁に外界と交易していたため、船が十三行人の主な交通手段だと推断できよう。

お手伝い

工芸

ウェイちゃん：工芸ってどういうことなの？

ねえさん：辞書の説明によると、工芸ってのは、色んな違うツールで実用できれいな日用品を作ること。その範囲は広くて、ほぼ人類の生活のすべてを含む。

ドードーくん：じゃあ、十三行人にはどんな工芸があった？

ねえさん：色々あったよ。土器、石器と鉄器など……

バディと比べて、イバイの土器作りへの興味はとても強かった。

バディが最も好きなのは、素地土づくりを行うこと。これは土器作りの第一歩でもある。すなわち、粘土を採取した後、水を入れ、平均に混ぜ合わせること。バディはときどき自ら粘土の中に飛び込み、それを踏みつけた。処理済の粘土で土器を作ったら、土器はひび割れが入りにくく、壊れることがめったにないと、母が言った。

作業が終わった後、足が泥だらけのバディは抜け出した。バディは土器造りに興味がなかった。

バディとは逆に、イバイは辛抱強く、興味津々で成形の過程を見ていた。これは確かに、簡単な作業ではなかった。一体の土器を作るために、母は木の盤で生地を支えながら、緩やかに手で練った。すべての動作に気をつけなければならなかった。

今日、母は突然、イバイを土器作りのステップに参加させるという考えがひらめいた。そこで、母はイバイに「母の手伝いをしましょうか」と訊いた。

お手伝い

イバイは信じられないで、目を大きく見開いた。母はなんと、彼女に手伝いをさせると訊いた。つまり、母は彼女が手伝えると思ったのか。

興奮したイバイは両手を広げ、「もちろん！」と答えた。母はすぐ一本の稲わらをイバイに渡した。

イバイもすぐに母の考えを読み取った。母は、イバイに稲わらを形ができている土器の表面に軽く押し付けて、丸い紋様をつけてほしいと頼んだ。前にイバイは母がこうしたのを見たことがあった。

イバイはわくわくしながら作業を始めた。彼女は慎重に土器の表面にたくさんの丸い紋様をつけていった。母がつけたものには負けず、きれいな紋様だった。

作業の過程はすごく遅かった。母もなるべく急き立てずに、イバイにゆっくり作業させた。

ようやくイバイが一個の土器を飾り終えたところで、ちょうどバディが戻ってきた。イバイはすぐバディに見せびらかした。「見て見て、お兄ちゃん、これ、私がやったの！」と。

母もイバイをほめた。そうよ。イバイは母の手伝いができるいい子だな。これは焼いたらきっと、一番きれいな土器になる、と。

だが、母がイバイをほめるのを見て、バディはとても納得できなかった。

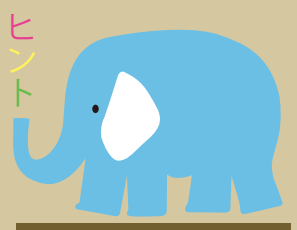
バディは母に自分の不平をもらした。

「僕だって手伝ったよ。粘土を踏みつけた

り、役に立てる石ころをたくさん拾ったりして、石で支えを作ったんだ」

そして、バディは自分が作った支えを取り出し、「どうだ、すごいだろう。これを作るのも大変だったよ。だから僕のこともほめてくれよ。ねえ」と、母に言った。

母は微笑みながら兄妹を抱きしめた。そうよ、二人ともお母さんのいい助手よ。ご苦労さん。と、言った。

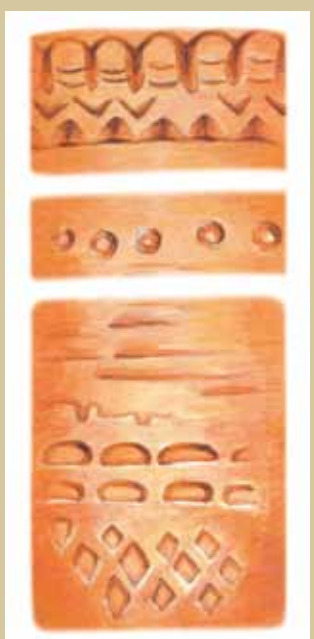


ヒント

● 十三行遺跡からは大量の土器の破片が出土している。完全な土器と修復済みの土器は、合わせて100個余りである。破片と数少ない美麗な土器から、当時の人はすでにいい土器作りの技術を持ったと推測できよう。

● 十三行人が作った土器は、オレンジ色や赤色である。形としては、丸底の壷が最も多く、次は平底の壷、瓶、盆、鉢などがある。

丸底の壷はだいたい、頚部以下に四角の紋様がついていて、瓶、盆と鉢には円形とドットの紋様がついている。図形のような紋様は、中国東南沿海で出土された土器にあるものに似ている。



色々な紋様

十三行人の土器作りの過程

❶ 粘土の採取：河岸にある粘土を取った可能性がある。

❷ 素地土作り：まず砂と礫を取り除く、そして細粒砂を適量に混ぜて、踏みつけたり揉んだりして、粘土と細粒砂を均一に混ぜ合わせる。細粒砂を混ぜるのは土器の強度を高め、焼く時に割れるのを防ぐため。

❸ 成形：輪積み製法で成形する。そして板で叩いて、土器の表面を平らにする。

❹ 施文：土器の表面に紋様を押し付ける。

❺ 乾燥と焼成：成形と施文が終わった後、しばらく放置して乾燥させ、焼く時に割れるのを防ぐ。学者たちは研究により、十三行人は野焼きで土器を作ったと推測した。

●十三行人はもう鉄器時代に入ったが、未だに少量の石器を使っていた。例えば支え、砥石、石の糸車、凹石などがある。

●「凹石」とは、十三行遺跡で発見された最も多い石器の一種。元々は川で転がり、表面が滑らかになった石だった。だいたいは丸くて両端が少々高く、手で握ることに向いている。凹石は叩くのに便利なので、石鎚として使われていた。その使用範囲も広かった。「凹石」と呼ばれるのは、長期間使われたことで正面と周りに無数のへこみができ、さらに使われると深いへこみができたことによるもの。

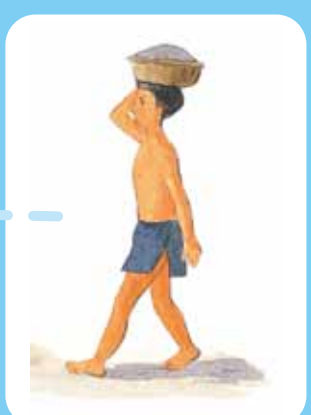
●十三行遺跡の西南で、学者は錬鉄炉の遺構を大量発見した。

これは台湾における先史考古で唯一錬鉄の跡が発見された遺跡で、十三行文化が鉄器時代に入った証明にもなった。

鉄器はさびて腐食されやすいため、十三行遺跡で出土された鉄器には、ひどくさびた鉄器の破片が多く、どのようなものかは判断しにくい。十三行人がおそらく鉄で斧、鋤、刀と鏃などを作ったと推測された。

十三行人の製鉄の過程

❶ 原料を採取する。十三行人は、おそらく海岸で採集したチタン砂鉄を採った。新北市八里区から福隆海岸までは、砂鉄が豊かな地区だった。そして、観音山ろくの大南湾層にもリモナイト鉄鉱石があった。すなわち、これらの原料は十三行人にとって、手に入れやすかった。



❷ 砂鉄やリモナイト鉄鉱石と石炭とを混ぜ合わせ、またはたたみ合わせふいごに入れた。（一部の）鉄鉱石は焼いてから銑鉄に戻る。原始的な方法なので、火力は足りず、時々二段階で製鉄を行わなければならなかった。まず、一号炉で酸化鉄を生産し、次に二号炉で酸化鉄を焼いて銑鉄にした。

❸ 銑鉄ができたら、石鎚でそれを叩いて、各種の鉄器に作る。

商船が来たあの日

貿易

ウェイちゃん：貿易って何？

ねえさん：ものを買ったり売ったりすることだよ。

ドードーくん：じゃあ、十三行人って買うほうなのか。それとも売るほうなのか。

ねえさん：両方ともしていたんだ。

ドードーくん：彼らのお金はどんなのだった？

ねえさん：十三行遺跡では漢人の器物も発掘された。そして、漢代以降から宋代までの貨幣も発見された。これは、十三行と漢人の二つの文化の接触と、彼らに交易行為があったことを説明している。だが、交易の仕方は未だに物々交換だと、学者に推測された。つまり、漢人のお金は十三行人にとって、ただの「物」にすぎなかった。

十三行人はそれを手に入れた後、高級なアクセサリーだと見なしたかもしれない。なぜなら、遺跡で発見された貨幣には、ひもを通す穴があり、十三行人にネックレスとして使われた可能性がある。

バディが最も早く、漢人の大きな商船が近づいてくることに気づいた。それは、妹のイバイとビーちゃんなど、村の子供たちと貝掘りをしているところだった。

バディは少しぼーとした後、すぐ大声で叫びだし、小さな手でだんだん接近してくる商船を指した。

これで、すべての子供は船に気づいた。みんなはためらわず、叫びながら家まで走り、親に知らせた。

しばらくの後、村の全員は商船が来ていることを知った。ほとんどの村人は仕事を中断し、色々な準備を始めた。

何のために準備するのか。それは、漢人と「物々交換」をするためだった。

ようやく、漢人の商船が接岸し、漢人の商人たちが上陸する時、みんなはすでにたくさんの鹿革、鹿の干し肉と角（ロクジョウ）などを用意しておいた。

上陸した漢人の中の三、四人は今まで、何回もここに訪れたことがあった。彼らは子供たちを見て、微笑みながら彼らの頭を撫でた。

そして、双方は一連の身振り手振りで交易を始めた。言葉が通じないため、みんなはお互いの表情やしぐさを観察し研究しなければならなかった。

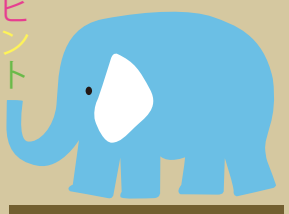
最後に、多くの人はやっと欲しい物を手に入れ、満足した。

漢人たちは交易が終わった後、すぐ船には戻らないで、村に何日間か泊まって休憩していた。その後、村人たちに手を振って、出航した。

漢人が船出する日に、また村人たちと交易したい人の一団が訪れた。だが、彼らは漢人と違って、船ではなく両足で歩んできた。

彼らは、台湾の別の場所に住む人々で、わざわざ十三行の地へ鉄器と銑鉄を交換しに来た。十三行以外の人はほとんど錬鉄ができず、錬成された鉄を加工して器具にするくらいしかできなかった。そこで、十三行

人の最も売れる交換物は鹿革、干し肉やロクジョウではなく、珍しい鉄器と銑鉄の塊だった。



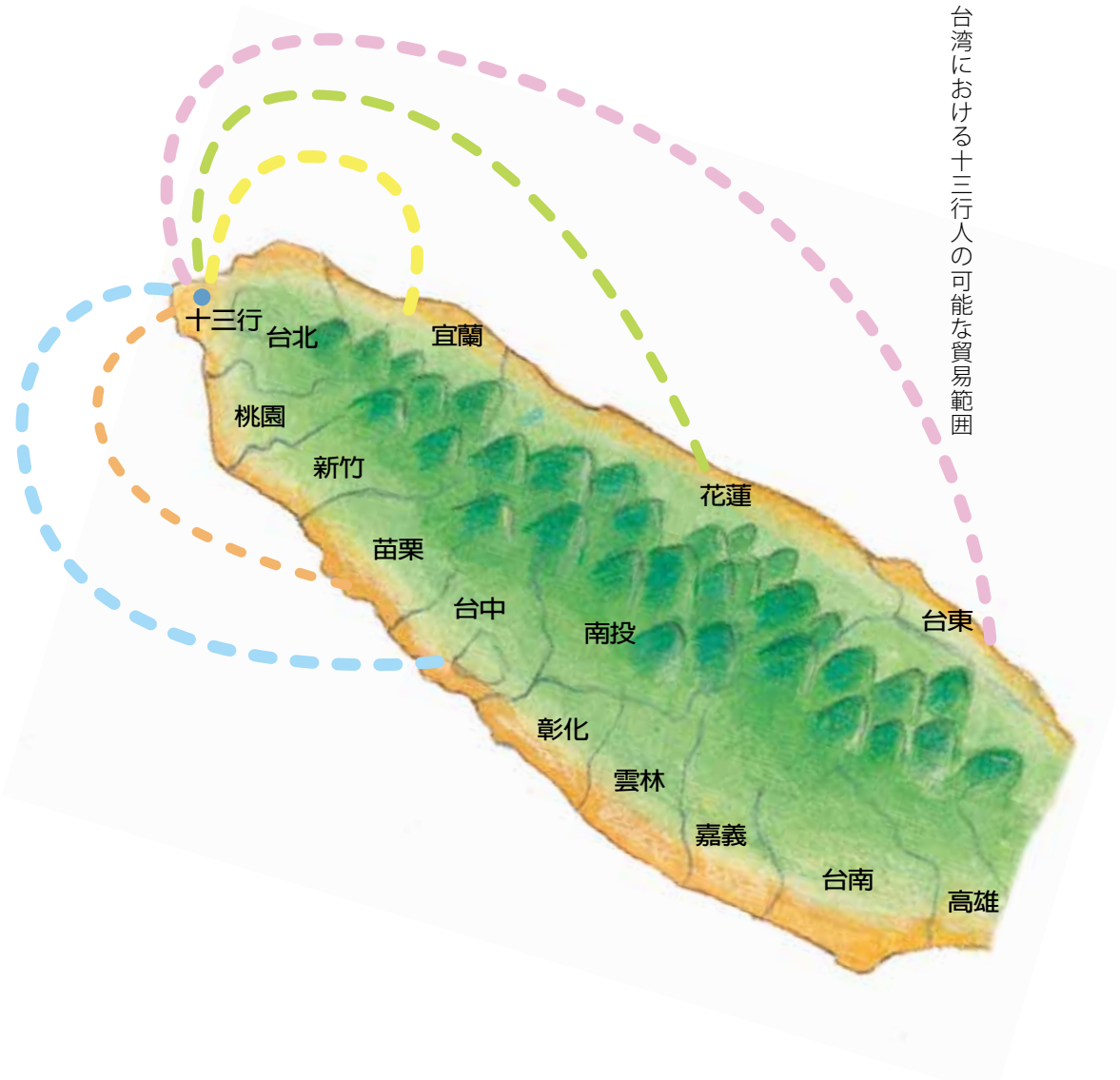
ヒント

● 学者たちは十三行遺跡から出土した遺物から、十三行人が活発に交易活動をしていたと推測している。十三行人は島内外かかわらず、他民族と時々交際し交易活動を行っていた。

●宋代以降、泉州は大きな商港になって、当時最良の商船で世界各地と貿易活動を行っていた。台湾原住民、例えば十三行人が、漢人の商船が行き来するのを見ていたのは想像できる。

●十三行遺跡で発見された金、銀器、青銅とガラス製のものは、地元で作られたものではないと思われる。ガラスの腕輪、イヤリングとビーズなどは、南洋や中国産だと推測される。

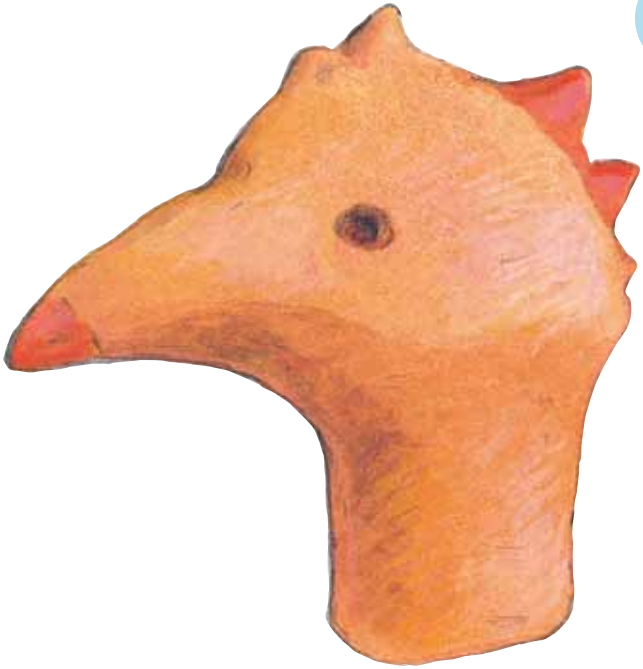
●十三行人は土器作りに長けていたが、十三行遺跡では、台北盆地、花蓮、台東、苗栗、宜蘭冬山河流域や台中沿海から伝来された土器も発見された。十三行人は時々これらの外来土器を副葬品として使っていたため、彼らの外来土器を大切にする気持ちがうかがえる。



台湾における十三行人の可能な貿易範囲

ビーちゃんを偲ぶ

葬儀



ドードーくん：ねえさん、十三行遺跡では発見されたお墓も重要だと聞いたけど。

ねえさん：そうだよ。十三行遺跡では、約200基のお墓が発見された。

ウェイちゃん：おお、こんなにたくさん…お墓ってすごく怖いよね。

ねえさん：ううん、お墓を怖く感じる必要はない。それも私たちの生活の一部で、考古学的には、お墓の発見は私たちに色んな宝物の手がかりを提供してく

れるし、私たちに原住民の生活をより深くわからせる。お墓の形式は、一つの民族の宗教と社会概念を反映でき、副葬品の分析からもその民族の物質生活を理解することができるんだ。

ビーちゃんはイバイと同じ年くらいで、イバイの一番の親友。兄のバディ以外では、ビーちゃんがイバイと最も親しい幼なじみであった。

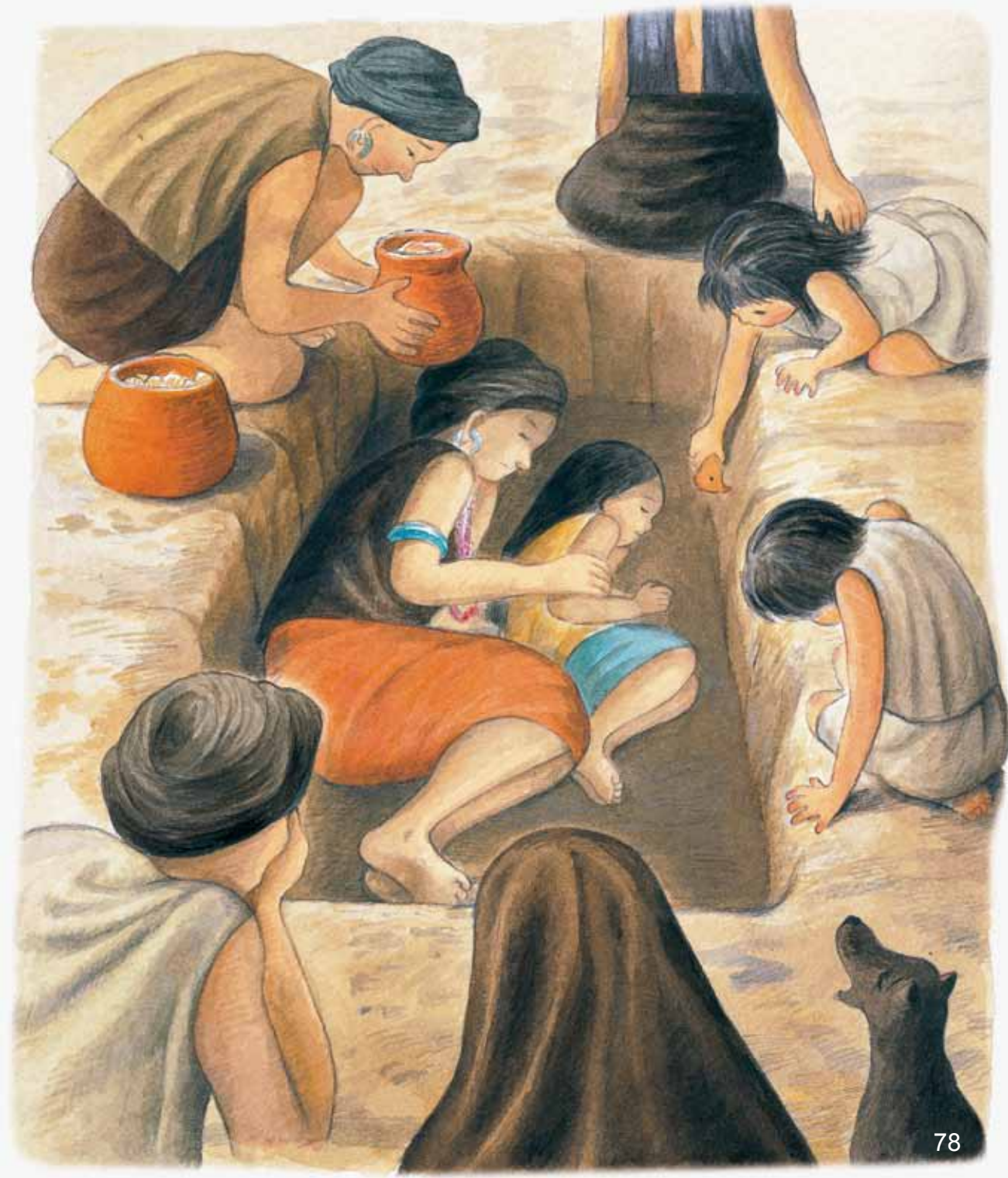
二人は今まで楽しい日々を共に過ごしてきたが、これは末永く続けることはできなくなった。

ある日、ビーちゃんは母と共に、海におぼれて他界してしまったのだ。この悲劇について、イバイの心は深い自責の念に満ちていた。その時、イバイは砂浜に遠くないところにいた。だが、まだ幼いので、ビーちゃんの異常に気づき、村人に助けを求めにいった時は、すでに手遅れだった。

明日に、ビーちゃんと母は一緒に葬られることになった。今、イバイは自分の母と共に、一つの土偶を持って、重い足取りでビーちゃんの家

へ歩いていった。

この土偶はイバイの最高傑作で、ビーちゃんに気に入られた。ビーちゃんは、イバイにその土偶をくれないかと聞いたが、イバイは惜しく思い、今度同じのを作ってあげると約束した。イバイはとても悔しかった。なぜ自分はそんなにケチなのか、と。ビーちゃんは一番大切な親友だよ。ビーちゃんがそれが欲しいなら、気前よく彼女にあげればよかったのに。今、それを副葬品としてビーちゃんにあげることになった。



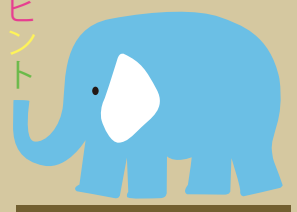
ビーちゃんの父は涙を流しながら、土偶を手渡され、これはビーちゃんにとって一番いい副葬品だとつぶやいた。

他の副葬品もすべて用意された。鹿の足、きれいな壷と、ガラスの腕輪などがあった。

ビーちゃんと母は家に遠くないところで葬られた。母娘は、遠くに行った感じがしなかった。家族と、イバイのような親友のそばにいるようだった。

ビーちゃんと母が葬られる時、二人とも体を曲げられ、同じ方向を向けて横たえられた。まるで一緒に眠っているようだった。これを見て、イバイはある日の午後、ビーちゃんの家に遊びに行った時、ビーちゃんと母がちょうど昼寝していたことを思い出した。今の母娘の姿は、その時とほとんど変わっていない感じがした。

安らかにお眠りください。あなたのことをずっと忘れない、と、イバイは親友を見ながら思った。



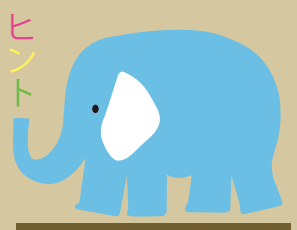
ヒント

- 十三行遺跡で発見された墓は数多く、複雑なタイプがあり、原住民文化を研究する大切な証拠になる。
- 台湾原住民にほとんど「屈葬」という風習がある。だが、十三行遺跡で「横臥屈葬」という特徴のあるお墓が大量発見した。その意味は何かが、より一層の研究を待っている。
- 十三行遺跡で発見された約200基のお墓の中でも、半分くらいの中には副葬品がある。例えば金、銀器、鉄器、ガラス製品、土器、唐、宋代の貨幣、イノシシの牙、大量の貝殻や獣骨などがある。

貝殻や獣骨の発見は、十三行人が死者に食べ物を供える葬儀があった可能性があると説明した。

● 十三行人は、遺体を布やむしろで包む習慣があった。

死者に食べ物を供える十三行人



ヒント

十三行人はどこに行ったのか

発掘された証拠により、十三行遺跡の年代は、約1800年前から500年までだったとわかる。なぜ十三行人はこの地で1300年間も暮らしてきたのに急に消えたのかはいまだに謎だが、出土された文物と現象が、十三行人は平埔族原住民のケタガラン族と関連性があることを示唆している。ケタガラン人は300年前まで台北地区の主な住人で、30個の平埔族蕃社に散らばっていた。

それからの200年間、大量の漢人が台北盆地に移入し、積極的

に土地を開墾するようになってから、ケタガラン人はだんだん漢化されていき、人口が減る一方で、言語も文化も消えてなくなっていった。

そして100年前の日本統治時代初期になると、台北地区の平埔族原住民はほぼいなくなった。今、「ケタガラン」は歴史的固有名詞になり、言語も文化も消えたも同然だが、漢人と通婚したため、完全に消えたわけでもない。すなわち、今の私達は、彼らと血のつながりがあるかもしれない。

参考書目

『遠古台湾物語』呂理政著；呂理政、夏麗芳イラスト、南天書局、1997

『台湾における考古』臧振華著、行政院文化建設委員会、1999

『台湾における遺跡』劉益昌著、台北県立文化センター、1992

『台湾における先史文化と遺跡』劉益昌著、台湾省文献委員会、台湾史跡源流研究会、1996

『センちゃん、考古を学ぶ』劉克竑著；李漢倫イラスト、行政院文化建設委員会、1997

『台湾における先史時代の人間』劉克竑著；邱千容、林致安イラスト、行政院文化建設委員会、1997

『八里十三行の先史文化』漢聲出版、1995

『人面土器のお家』瞿海良著、台北県立十三行博物館、2001

『土偶ファミリー：十三行人物語』管家琪著、邱千容イラスト、新北市立十三行博物館、2011

私の博物館見学体験

今回博物館を見学して、
私は……
と思います。
なぜなら……

（色々書いて、みなさんにあなたの
考えを教えてくださいね）

十三行博物館・こどもシリーズ 1

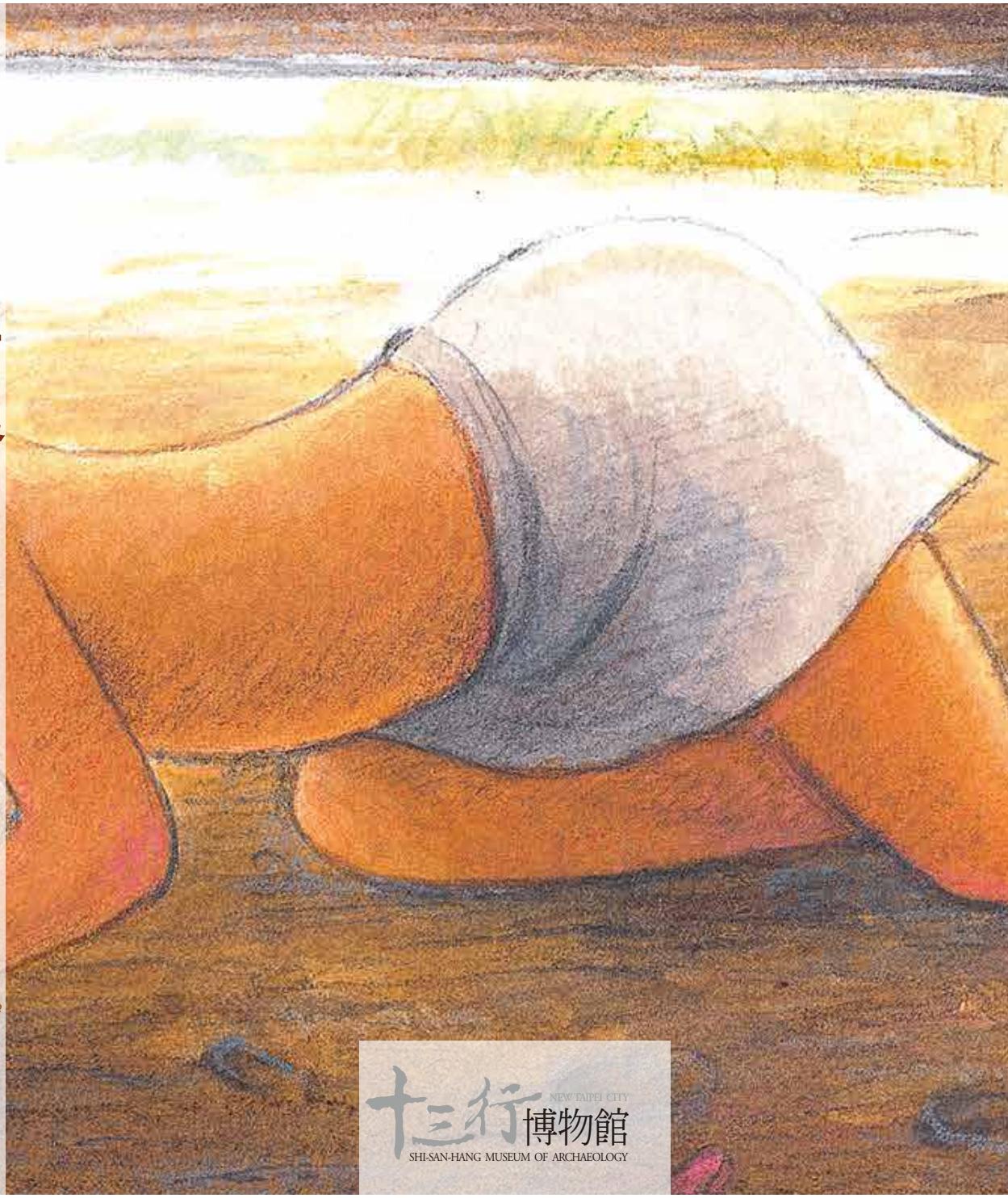
過去に戻ろう —— 十三行人の生活

発 行 者 ：呉秀慈
著　　者 ：管家琪
訳　　者 ：陳 鋼
審査委員：曾秋桂、游貞華
編 集 長 ：岳彩琨
イラスト：邱千容
冊子デザイン：邱千容
企　　画：高麗真
執行編集：蔡易軒
出　　版：新北市立十三行博物館
台湾新北市八里区博物館路 200 号
電話（886）2619-1313
FAX:(886) 2619-5234
http://www.sshm.ntpc.gov.tw
印　　刷：新北市維凱創意印刷庇護工場
出 版 年 ：2014 年 12 月
定　　価：

十三行博物館
こどもシリーズ1

過去に戻ろう

十三行人の生活



十三行博物館
NEW TAIPEI CITY
SHI-SAN-HANG MUSEUM OF ARCHAEOLOGY